



雲青志

さいたま市立大成中学校 学校だより

11月号 令和6年11月1日

心を磨く

校長 福田博志

朝の出勤時に、昇降口付近にたまった落ち葉を黒澤さんがきれいに掃いてくれている姿を見かけます。美化委員会による「あいさつクリーン活動」では、近隣の路上をととてもきれいにしてくれました。そういう清掃活動のおかげで、正門付近の道路から昇降口にかけて、いつも美しい状態を保っています。ありがとうございます。

校内を歩いていると、廊下がたいへん美しいことにも気がきます。ゴミが落ちていないだけでなく、まぶしいくらいにピカピカ光っているように見えます。このことは、先日、学校訪問でのお客様からも褒められました。毎日、朝の清掃時にぞうきんで床をしっかりと拭いてくれているからです。拭くというよりも「磨いている」といった方が適切かもしれません。短い時間の中ですが、全身全霊で清掃に取り組んでいる生徒を見かけます。その生徒は、床を磨くことによって心を磨いているように私の目には映りました。そういう生徒の姿を見ると、感動し鳥肌が立つほどうれしくなり感謝の気持ちが湧いてくるのです。



大成中学校は、たいへんきれいな学校だと思います。その理由は、ゴミを落とさないように心掛けている人が多いからだだと思います。また、清掃に一所懸命取り組んでいる人も多くいるからだだと思います。

掃除は、やる前は億劫おっくうですが、やり終えた後は、充実感や爽快感が味わえます。これは、一見、益(得)はなく意味もないことのように思えますが、どうやら、そうではないようです。

私たちは、物事を実行する上での価値基準として「益(得)がなければ意味がない」と考えがちです。しかし、2500年前の中国、春秋時代・斉(せい)の宰相、晏子(あんし)は、「益はなくとも意味はある」という言葉を残しました。この名言に出会った、株式会社イエローハット創業者でNPO法人「日本を美しくする会」の鍵山秀三郎さんは、掃除の励行を通して大きな飛躍を遂げた企業経営者の一人です。鍵山さんは、「掃除をすることは、心を磨くことだ」と言っています。

確かに、利益や効率を追求することは、当たり前に必要なことですが、人としての心の鍛錬を図り、人間性の向上を得ることも益の一つなのではないかと思えます。人間性の向上は、一朝一夕では、実現できません。すぐに益につながらなくても、「掃除をする あいさつをする 靴をそろえる 姿勢を正す」など、当たり前のことを着実に実行しようとするという心掛けが大切です。一つ一つの行為はささいなことですが、それらが積み重なったり合わさったりすることによって、きっと大きな益となると思えます。自分の利益に結びつかないことでも、周囲の人のために努力することや心を整えることに意味があるのです。

目先の損得と関係のない心の鍛錬を続けていきたいものです。